

内心の分離 Internal Schism.

余の始めて基督教に接するや、余は其道徳の高潔なると威嚴あるに服したり、余は余の不潔不完全を悟りたり、余の言行は聖書の理想を以て裁判さるれば實に汚穢（せうたい）云ふに忍びざるものなる事を發見せり、余は泥中に沈み居りしを悟れり、余は故意を以て人を欺きながら余の罪人なるを知らざりし、余は虚言を吐くを以て意に介せざりき、余は他人の失策を見て喜び、他を倒しても自己の成功を願へり、余の目的は高名富貴にありき、余は國を愛すると揚言しながら余の野望を充たさんとせり、余は他人の薄情卑屈を責めながら自分も常に他人の不利益を望めり、余は君子振りて實は野人なりき、余の目的は卑陋（ひろう）なりし、余の思想は汚穢なりし、是を思ひ彼を思へば余は實に自身に恥て若し穴あれば身を隠し神にも人にも見へざらん事を欲せり。

然れども後悔先に立ず、今日より改めて善人となるべきのみ、「天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹（なんぢら）も完全すべし」(馬太傳第五章四拾八節)、余は大いに心に決して曰く、「余は今より全く余の言行を改むべし、余は再び決して虚言を吐かざるべし、余は決して他人を誣し他人を惡口せざるべし、余は情慾を慎むべし、余は懶惰（らいだ）ならざるべし、余は徳を以て恨に報ゆべし、余は功名心を根より斷つべし、余は謙遜なるべし、余は酒も煙艸（たばこ）も芝居も廢すべし、余は驕らざるべし、余は日曜日を清く守るべし」と、余は實に全然たる改革を宣告せり、而して獨り心に決するを以て足れりとせず、余の友人に向て余の決心を宣告し、天地に誓ひ、會衆に約し、完全無缺の生涯を送らん事を斷決せり、教師之を聞て喜び、友人は余の改心を祝せり、余は思へらく余は復生せりと。

ひとたび堅く定めしのは

動きはせじと我は思へり

余は一二ヶ月間余の決心を實行せり、余は實に新らしき人となりたり、余の改心は非常なるものなりと人も思へり、我も思へり、余は神の余に近きを感じ、余の朝夕の祈禱は長くして熱心なりき、余の言語は少くして重味ありき、余の謹慎は余の友人の厭ふ程なりき、昨日迄の「オシャベリ」は今日の沈黙家たり、語るに涙あり聖書の引用あり、絶間なく祈り絶間なく讚美し、余は實に純然たる聖人となり、エノクの如く神と歩めり。

然れども此製造的の神聖は長くは續かざりき、忽ちにして余の言行は後戻りし始めぬ、余の謹慎は余の友人の忌みしのみならず、余も**毈勉**（びんべん）を以て暫時持續けしものなれば、數日にして余は不自由と苦痛を感じ、少小の豪遊何ぞ信仰の妨害たるべけんや、沈黙は氣鬱病を導く恐れあり、余は常に石像の如くにあるべからざるなり、警備一方に緩みはじめて全部壞れたり、三ヶ月を経ずして余は決心以前の余に復せり、今は余の基督信徒たるの徴候は冷淡ながらも日曜日毎に信徒の集會に列すると、イヤ／＼ながらも朝夕頭を伏て意味なき祈禱をなすに止まりたり。

然れども永遠の生を有する心靈は聖經の刺詞（しじ）を感じざるを得ず、「人の罪を定むること勿れ、恐くは爾曹も亦罪に定められん」（馬太傳七章第一節）、——嗚呼之れ他を惡口すべからずとの教訓ならずや、余が友人と會する時、蔭ながら人を批評するを以て第一の快樂となし、特に彼の牧師、是の信徒の缺點を摘發して談話の好材料となすは、之れ聖書の大訓に戻り、明瞭なる普通道德に反するの行狀にあらずや、多辨に對する聖書の誠は左の

如し。

わが兄弟よ爾等多く師となるべからず蓋われら師たる者の罰を受くること尤も重しと知ればなり、われらは皆しばしば愆あやまちを爲せる者なり人もし言に愆なくば是全人にして全軀に轡わづかを置き得るなり、夫れ我等馬を己に馴しなはせんとして其口に轡を置くときは其全軀を馭よすべし、舟も亦その形は大きく且狂風に迫はるゝとも小舵わいさきを以て舵子かざりの意の隨まに之を運ばすなり、此の如く舌も亦小きものにして誇ること大なり視よ微火わづかのひいかに大いなる林を燃すを、舌は則ち火すなはち惡の世界なり舌は百體の中に備はりありて全軀を汚し又全世界を燃すなり舌の火は地獄より燃へ出づ、それ各類さうごの獸禽昆蟲けものとりはふもの海にあるもの皆制を受くまた既に人に制せられたり然れど人たれも舌を制し能はず乃ち抑へがたき惡にして死惡の充てるもの也、我儕われら之を以て主なる父を祝ひまた之を以て神の形に像りて造られたる人を詛ふ、祝と詛一つの口より出づわが兄弟よ此の如きことあるべきにあらず。
(雅各書第三章從一節至十節)

余は之を讀む毎に鑿のを以て余が良心を穿うがたるゝ心地せり、Speech is silver, Silence is golden.(若し雄辨は銀なれば沈黙は金なり)、人は二個の耳を有し一箇の口を有するは二度聞て一度語れとの謂なりと、Think twice,speak once(二度考へて一度語れ)、楠正成曰く「衆愚の愕々がくがくたるは一賢の唯々みに如かず」と、余の不完全なる余の頑愚なるは余が余の口を支配する能はざるに依て明かなり、余にして余の多辨を制する能はざれば余の基督教は何の用がある、余は神は唯一なりと信ず、如此信かくずるは善し惡鬼も又信じて戰愕おのけり(雅各書二章十九節)、余にして此明白なる基督教の訓誡を犯しながら世人に向て罪の懺悔を勧め神の裁判を説教するとは余の鐵

面皮もこゝに至て其極に達せりと云つべし、然り余は大偽善者たるを感じ、余は余の行^{おこなひ}を改むる迄は何の面目ありて他人に基督教を説くを得んや。

聖書は曰へり、凡そ兄弟を憎むものは即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺すものは窮^{かき}りなき生命その衷^{うち}にをることなし此は爾曹の知るところ也^{「ヨハネ」}、余始めて之を讀むや酷に過たる言と思へり、然れども能く其意を探ぐるに於て最も當を得たる言なるを知れり、カインは其弟アベルを憎て彼を殺せり、殺人罪は憎惡の結果なることは歴史と事實の證明する處なり、而して天道は人を罰するに當て罪の結果を以てせずして之に至らしめし意志を以てするなれば、神より人を見給ふ時は意志を執行するもせざるも差異あるべきにあらず憎惡の情を發表して殺害に至らしむるも然らざるとは其人の教育境遇祖先より受けし遺傳等に由るものなり、昔時の虐王の如く彼を支配するの法律と社界の制裁なく、彼を威赫するの宗教なきときは、彼の憎む人は彼は殺せしなり、ジョン・バンヤン曾て刑場に引き行かるゝ罪人を指て曰く、「若し神の恵に依らざりしならば彼の罪人はジョン・バンヤンなり」と、憎惡の念余に存すれば余に殺人罪を執行するの危険あり、而して神の裁判に引渡さるゝ時は殺人罪の宣告を受くるとも余は何を以て余を辨護せんとするや、而して余の靈よ、汝は人を憎みし事なきや、汝は人を憎みつゝあるにあらずや、「凡そ兄弟を憎む者は即ち人を殺すものなり」、汝、殺人殺よ如何にして、汝は汝の罪より免かれんと欲するや。

聖書は言へり「凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也」と、而して此標準を以て判決せらるゝ時は丁年^{ていねん}以上の男子にして何人能く姦淫罪より免かるゝを得んや、「我より退け汝姦淫を犯すものよ」との工

ホバの宣告は誰の受くべきものなるや、他人の淫行を摘發すると雖も自己の中心已に姦淫病の骨からみとして存するを如何せん、人は他人の病重きを見て自己を無病と信ぜんと勉むるものなり、見よや世に社會風俗の壞亂を發くに於て最も熱心なるものは多くは自身敗徳の人なる事を、我は稅吏みつぎとりの如く民を虐げずと言って自己の無罪を神の前に建てんとするパリサイ人の心は普通人間の心なり、他人の罪あるは自身の罪なき證にあらず、自身已に梅毒を心に醸しながら他の梅毒患者を罵りその醜態を摘揚して意氣揚々たるの愚者は誰なるぞ。

汝盜む勿れとの誠も能く聖書の原理に基ひて探究するならば我の破らざる誠にはあらざるなり、盜とは竊盜強盜をのみ云ふにあらずして總て天より我に賦與せられざるものを我物とするを云ふなり、我萬人に秀づる才と學とを有せざるに、或は友人の保庇ほひに依り、或は諂媚てんびの方便を以て、我の保つべからざる官職を保つに至れば我は其官と其給とを盜むものなり、神我を傳道師として造られざりしに我自ら傳道の職を取り、其尊嚴と威力とを使用すれば我はエリの子供と均しく傳道職と之に伴ふ榮譽とを盜みしものなり、(撒母耳前書二章廿二より廿五迄を見よ)、神を崇め國家に盡さんが爲めに我に與へられし此貴重なる生命と時間とを己が快樂の爲めに消費するものも亦盜人にあらずして何ぞや。

貧苦に責められ、饑餓に迫りし老母と愛兒とを救はんが爲めに心ならずも鄰人の單衣一枚を盜みしものも社界は法律てうものを設けて罰すると雖も、白晝はくちゆうに公然と法律の保護の下に貧者を虐げ國家の富を掠奪しつゝある無數の盜人は措おて問はざるなり、國家の犯罪人中十中の八九は盜人なりと、然れども人類が未來の裁判を受くるに及では竊盜罪を犯さざるものとは實に寥々たるならん。

余は偽善者なり、人を殺すものなり、姦淫を犯すものなり、盗人なり、而して聖書なる電氣燈を以て尙も余の心中を探るならば余は神を誦すものならん、人を欺くものならん、——嗚呼、聖書の言にして、誤謬ならしめよ、余は如斯光輝に堪ゆる能はざるなり。

余は罪の罪たるを知らざりし以前は罪を犯すも左程の苦痛を感じざりしが、罪の惡むべき事、罪の懼るべき事、罪の罪たる事を知りし後は罪を犯せし時は名狀すべからざる不快を感じるに至れり、而して罪の特性たるや、我等に懼怖を與ふると雖も我等をして之を避くるの力を與へず、我等は罪を犯して、歎じ、歎じて、怖れ、怖れて、失望し、失望して、又同じき罪を犯すものなり、米國產ラットルスネーク(毒蛇の名)の木鼠を獲んとするや、その尾を振り、其口を開き、木上にある木鼠をして危險の念を以て震動さしめ、終に自ら下て毒蛇の口中に投ぜしむると云ふ、我等の罪に於ける亦同じ、罪の怖るべきを知て、反て益々其罪を犯すに至る、恰も絶壁の上に立つ時は身を千仞の下に投ぜんとする念の起るが如し、此經驗を有せざる無慈悲の教役者は弱き信徒の罪を敲くのみを以て彼等を救はんと思へり、余も此心靈の藪醫師の爲めには懼るべき危險に陥りし事數度なりき。

余をして罪を犯さしむるものは余に存する罪のみにあらざるなり、奈は罪に沈める此世界に來り、未だ神を信ぜざる此國に生れ、余の境遇余の社會は余を罪に導くものなり、虚言を吐かざれば事務を辨じ能はざるの場合あり、余にして真正直を言はんか、余一人の不利益なるのみならず他人に迷惑を感じしむることあり、如斯時に當て虚言を吐かんと欲すれば良心の責むるあり、欲せざれば事の辨ぜざるあり、行て教導師に意見を問へば、彼等は云ふ君如斯社會を去れよと、然れども基督信徒は悉く牧師傳道師たるべきにあらず、教役社會に身を投じて

行^{おこなひ}を清ふするより易^{やす}きはなし、然れども我の天職にして學術殖産商業等にあると信する時は我は今日の位置を去るべきにあらず、罪を犯して天職を全ふせんか、或は身を清くするのみを以て我一生の目的とせんか、嗚呼未信徒社會の中に在て基督教的の生涯を送らんとするものゝ苦と涙は、彼の聖書を小脇に挟み祈禱會と演說會と説教會を主^{つかさ}じるを以て永遠より定められし天職と信する羨むべき人士の迎^{むか}ふ推察する能はざる處なり。

我若し仁道を以て世に對せんとなれば世は詐欺を以て我を向へ、彼我に裏衣^{うはぎ}を求むるに依て我が外衣^{うはぎ}を彼にとらずれば彼は尙ほ我の靴をも帽^{ぼう}をも求む、彼我に對するに不正なるが故に我彼に報ゆるに不正を以てすれば彼我を責むるに我が信徒たるが故に正なるべきを以てす、彼は不信者なるが故に不正を爲すを以て正當なりと云ひ、我は信者なるが故に不正を爲すべからずと思へり、我の基督を信するは我をして不信者社會に於て最も預り易きものとせり、我の正直は我をして彼等の便具^{うづは}となし、我の良心の命を重ずる事は我をして偽善者の好敵手となせり、我若し彼の不正を責むれば、彼は云ふ汝の愛心を以て之を恕^{じよ}せよと、彼我を欺きて我に約を結ばしめ、而して后基督信徒たるの義務として此約を履行せしめんとす、我若し約を破れば彼は神と人とを欺きしものとして我を訴へ、我は詐欺者として、姦淫をなせしものとして、教會の裁判に渡さる、世に助けなきものゝ中に自己の罪を感ずる基督信徒の如きものはあらず、而して世に力強きものゝ中に罪を感ぜざる基督信徒(所謂)に勝るものなし、前者は戦々兢兢何事をも爲し能はず、後者は大膽不敵何事をも爲し得べし、罪より救はれんとするものも基督教會に來れ、正義と神聖との後楯を以て罪を犯さんとするものも基督教會に來れ。

如斯社會如斯教會に於ては我儕罪を犯さざらんと欲して犯さざるを得ず、恰も戰國の世に生れし人は戰爭は罪

なりと信ずると雖も戦はざるを得ざるが如し、我は罪を犯すものにして罪を犯さしめらるゝもの(Sinning and Sinned against)なり、我は神と争ふものにして神と争はざるを得ざるものなり、若し罪を犯さざるもののみが天國に入るを得るとならば地球は人を天國に送り出す處にあらざるが如し。

惡を爲すの罪に加ふるに善を爲さざるの罪あり、即ちSin of Commission and Sin of Omission なり、監督教會祈禱文懺悔の語に曰く「我等は爲すべき事を爲さず爲すべからざる事を爲せり」と、基督教の道德は惡を避くるを以て満足せずして進で善を行はしむ、「汝 なんぢのはつせざるしつひにほどこすなかれ 所不欲勿施人」と言ずして「凡て人に爲られんと欲することとは爾曹また人にも其ごとく爲せ」と言へり、我等は退て己を守るべきのみにあらずして進で人を救ふべきなり、「基督教の教義に由れば自己のみを救はんと勉むるものは滅亡に至るの人なり、懶惰は罪中の罪なり、何事をも爲さざるは惡事をなすなり、時を殺すも人を殺すが如く同じく罪なり、功なきの一生は罪の一生なり、フランクリンは言へり時は金なりと、基督教は言ふ時は永遠の一部分にして億萬心靈安否を決するの機なりと、(Ton Kaïron, 以弗所書第五章十六節參考) 我が憎惡の念を充たさんが爲めに人を死に至らしむるも殺人罪なり、人の永遠の滅亡に至るを手を束ねて傍觀するものも亦殺人罪に與からずと言ふを得ず、神豫言者以西結に告て曰く、

人の子よ我なんちを立てゝイスラエルの家のために守望者となす、汝わが口より言を聴き我にかはりてこれを警むべし。我惡人に汝かならず死ぬべしと言はんに、汝かれを警しめず、彼をいましめ語りその惡き道を離れしめて之れが生命を救はずば、その惡人はおのが惡の爲めに死なん、なれど其血をば我れなんぢの手

に要むべし。然ど汝惡人を警めん、に彼その惡とその惡しき道を離れずば、彼はその惡の爲めに死なん、汝はおのれの靈魂を救ふなり、又義人その義事をすて、惡を行なはん、に我れ躓礙をその前におかば、彼は死ぬべし、汝かれを警しめざれば、彼はその罪の爲めに死てそのおこなひし義しき事を記ゆる者なきにいたらん、然れば我れその血を汝の手に要むべし。然れど汝もし義しき人をいましめ、義しき人に罪ををかさしめずして、彼罪を犯すことをせずば、彼は警誠を受けたるが爲め、にかならずその生命をたもたん、汝はおのれの靈魂を救ふなり。

以西結第三章拾七節より廿一節迄

我は我たり爾は爾たりとの無情なる世界の精神は基督教の許さざる所なり、神は我等の手より惡人の血を要め給ふなり、兄弟の罪を犯すは我等の罪を犯すなり、人類責任連帶論は基督教の教義にして、近世社會學の結論なり。

汝は汝の責任を盡せしや、又盡しつゝあるや、「我知らず我あに我弟の守者ならんや」とのカインの答をして、汝の答たらしむる勿れ、汝日曜日を守りたるとして、汝は他人を苦しめずとて、汝の責任を盡したりと云ふべからざるなり、懶惰の罪、無情の罪、不注意の罪、——積極的の罪と消極的の罪、爲すべからざる事を爲して爲すべき事をなさず、汝如何にして來らんとする刑罰より免かれんとするや。

如斯にして神の靈を以て我が心を詮議さるゝ時は、我は隱るゝに所なきなり、我が人の前に表白し能はざるの罪も神の前には顯明なり、私の汚穢なる感情、私の卑陋なる思想、人知れずして犯せし罪、未だ人の知らざる我が心中の缺點、——嗚呼我は之を如何せん

たとひ我れわが愁を忘れ面色を改めて笑ひ居らんと思ふとも、

尙ほこの諸の苦痛の爲めに戰慄おのくなり、

我れ思ふに汝我れを釋し放ちたまはざらん

我れは罪ありとせらるゝなれば何ぞ徒然に勞すべけんや、

われ雪水をもて身を洗ひ

灰汁くわいじうを以て手を潔むるとも、

汝われを汚はしき穴の中に陥しいれたまはん、

而して我が衣も我を厭ふにいたらん。(約百九章廿七節より卅一節迄)

われ我罪に耻て神より遁がれんとするも神は我を遁し給はず、我はエホバの的となり、彼の矢われにあたり、彼の手わがうへを壓おさへたり、(詩篇三十八篇二)我東もとに行くも彼はあり、西に行くも亦彼を見る、神は裁判の神にいて宥恕の神にはあらざりき。

罪に責られて余は全く生涯の快樂を失へり、食事進まず、夜眠は妨げられ、事を爲す氣力なく、唯恐怖を以て震へながら日を送りたり、苦痛の余り余は一日教師の許もとを訪ひ、幸ひ二三の有名なる教導師の居合せたれば耻を忍びて余の心中の苦痛を吐露し彼等の援助を乞はんことを求めたり、然るに全く余の希望に反し彼等の内一人も余の要求に應ずるものなく、三人均しく答て曰く、余輩如斯經驗を有せずと、而して少しも余を省みざりき、余は心中の煩悶を表白せしを耻じ、余の思慮なきを歎じ、失望に沈みて家に歸れり。

天路歷程の記者ジョン・バンヤン未だ宗教上の事に關して雲霧の中に彷徨するや、一日懷疑止む能ずして近鄰の一牧師を訪ひ彼の心事を吐露して牧師の慰めを得んとせり、バンヤン曰く「余の心中に惡念かぎりなく湧出するは正しく余が神に捨てられ惡魔の奴隸となりし徵候ならん」と、牧師之を聞て嘆じて曰く「多分然らん」と、過敏なるバンヤンは失望の上に尙ほ一層の失望を加へ、殆ど立つ能はざるの位置に至れりと、彼年を経て基督に於ける平和を得し後彼の友人に告て曰く、彼の牧師は神學には委しき人なりしなれども未だ惡魔との經驗に於ては乏しかりし人なりしと。

愛に於て罪なる大問題の解折に就ては余は何人にも頼るべからざるを了れり、余は獨り此解譯を試みんと決せり、人は罪より免かれ得べきや、免れ得るとならば其途何處にあるや、この心中の苦痛より免かるゝにあらざれば余は何事もなし能はざるなり。

私が初めてキリスト教に接したとき、私はその道德の高潔さと威厳に感服した。私は自分の不潔さと不完全さを悟った。私の言行は聖書の理想によって裁かれるならば、実に汚らわしくて言うに忍びないものであることを発見したのである。私は泥の中に沈んでいることを悟った。私は故意に人を欺きながら、自分が罪人であることを知らなかった。私は嘘をつくことを少しも氣にかけなかった。私は他人の失敗を見て喜び、他人を蹴落としても自己の成功を願った。私の目的は高名と富貴にあった。私は国を愛すると公言しながら、自分の野望を満たそうとした。私は他人の薄情や卑屈さを責めながら、自分も常に他人の不利益を望んだ。私は君子ぶっているが、実は野人であった。私の目的は卑しく、私の思想は汚らわしかった。あれやこれやを思うと、私は実に自分自身を恥じ、もし穴があれば身を隠して神にも人にも見られないことを望んだのである。

しかし、後悔先に立たず、今日から改めて善人となるべきであるとする。「あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」(マタイの福音書五章四十八節)とある。私は大いに心に決意して、「私は今から全く自分の言行を改める。私は二度と決して嘘をつかない。私は決して他人を批評し他人を悪口しない。私は情欲を慎む。私は怠惰にならない。私は徳をもつて恨みに報いる。私は功名心を根っこから断つ。私は謙遜になる。私は酒も煙草も芝居もやめる。私は傲慢にならない。私は日曜日を清く守る」と宣言した。私は実に完全な改革を宣告したのである。そして、一人で心に決意するだけでは十分ではないとし、自分の友人に向かって自分の決意

を宣告し、天地に誓い、会衆に約束し、完全無欠の生涯を送ることを断決した。教師はこれを聞いて喜び、友人は私の改心を祝福した。私は「私は生まれ変わった」と思ったのである。

ひとたび堅く定めし後は

動きはせじと我は思えり

私は一、二か月間、自分の決心を実行した。私は実に新しい人になっていた。私の改心は非常なものであるとも思つたし、私も思つた。私は神が私に近いことを感じた。私の朝夕の祈祷は長く、熱心であつた。私の言葉は少なく、重みがあつた。私の謹慎は友人が嫌がるほどであつた。昨日までの「おしゃべり」は、今日の沈黙家であつた。話すには涙があり、聖書の引用があり、絶え間なく祈り、絶え間なく讃美し、私は実に純然たる聖人となり、エノクのように神と歩んだのである。

しかし、この作られた神聖は長くは続かなかつた。たちまちにして私の言行は後戻りし始めた。私の謹慎は、友人が忌み嫌つただけでなく、私も努力してしばらくの間持ち続けたものであつたので、数日にして私は不自由と苦痛を感じた。「ほんの少しの豪遊がどうして信仰の妨げとなるだろうか」「沈黙は鬱病を導く恐れがある」「私は常に石像のようである必要はない」と考えた。一方の警戒が緩み始めると、すべてが壊れてしまった。三か月も経たないうちに、私は決心以前の私に戻ってしまったのである。今、私がキリスト教徒である徴候は、冷淡ながらも日曜日ごとに信徒の集会に出席することと、嫌々ながらも朝夕頭を垂れて意味のない祈祷をすることに留まっていた。

しかしながら、永遠の生命を有する心霊は、聖書の刺すような言葉を感じざるを得ない。「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです」(マタイの福音書七章一節)——ああ、これは他人を悪口してはならないという教訓ではないか。私が友人と会うとき、陰ながら人を批評することを第一の快楽とし、特にあの牧師、この信徒の欠点を摘発して、会話の格好の材料とすることは、これ聖書の大切な教えに背き、明瞭なる普通道徳に反する行状ではないか。多弁に対する聖書の戒めは次の通りである。

「私の兄弟たち、多くの人が教師になつてはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。私たちはみな、多くの点で過ちを犯すからです。もし、ことばで過ちを犯さない人がいたら、その人はからだ全体も制御できる完全な人です。馬を御するためには、その口にくつわをはめれば、馬のからだ全体を思いどおりに動かすことができます。また船を見なさい。あのように大きくて、強風を受けていても、ごく小さい舵によって、舵を取る人の思いどおりのところへ導かれます。同じように、舌も小さな器官ですが、大きなことを言つて自慢します。見なさい。あのように小さな火が、あのように大きな森を燃やします。舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあつてからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。どのような種類の獣も鳥も、這うものも海の生き物も、人類によって制することができ、すでに制せられています。しかし、舌を制することができる人は、だれもいません。舌は休むことのない悪であり、死の毒で満ちています。私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るので

す。私の兄弟たち、そのようなことが、あつてはなりません」(ヤコブの手紙三章一節～十節)。

私はこれを読むたびに、^の鑿で自分の良心を穿たれる心地がした。「Speech is silver, Silence is golden.」(もし雄弁が銀ならば、沈黙は金である)とある。人は二つの耳を持ち、一つの口を持っているのは、「二度聞いて一度語れ」ということを言っているのだと。「Think twice, speak once」(二度考えて一度語れ)とある。楠正成は「多くの愚か者のわめく声は、一人の賢者の『はい』に及ばない」と言っている。私の不完全さ、私の頑固な愚かさは、私が自分の口を支配することができないことによって明らかである。私が自分の多弁を制することができなければ、私のキリスト教は何の役に立つであろうか。私は「神は唯一である」と信じる。このように信じるのは良いが、悪鬼もまた信じておののいている(ヤコブの手紙二章十九節)とある。私がこの明白なキリスト教の訓戒を犯しながら、世人に向かって罪の懺悔を勧め、神の裁判を説教するとは、私の鉄面皮もここに到ってその極に達したと言える。然り、私は大偽善者であると感じた。私は自分の行いを改めるまでは、何の面目があつて他人にキリスト教を説くことができるであろうか。

聖書は、「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません」(ヨハネの手紙第一三章十五節)と言っている。私が初めてこれを読んだとき、酷に過ぎた言葉であると思った。しかし、よくその意味を探てみると、最も当を得た言葉であることを知った。カインはその弟アベルを憎んで彼を殺した。殺人罪は憎悪の結果であることは、歴史と事実が証明するところである。そして、天の道理は人を罰するに際して、罪の結果をもつてせず、それに至らせた意志をもつて

するものであるから、神より人を見られるとき、意志を実行するもしないも差異があるべきではない。憎悪の感情を發表して殺害に至らせるのもそうでないのも、その人の教育、境遇、祖先より受けた遺伝などによるものである。昔の暴君のように、彼を支配する法律や社会の制裁がなく、彼を威嚇する宗教がないときは、彼は憎む人を殺したのである。ジョン・バンヤンはかつて刑場に引かれて行く罪人を指して、「もし神の恵みによらざりしならば、あの罪人はジョン・バンヤンである」と言った。憎悪の念が私に存在すれば、私に殺人罪を執行する危険がある。そして神の裁判に引き渡されるとき、殺人罪の宣告を受けるとしても、私は何を以て自分を弁護しようとするであろうか。そして私の霊よ、汝は人を憎んだことはないのか。汝は人を憎み続けているのではないのか。「おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者である」。汝人殺しよ、どのようにして汝は汝の罪から免れようと望むのか。

聖書は「情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」と言っている。そして、この標準をもつて判決されるとき、成年以上の男子にして、誰がよく姦淫罪から免れることができるであろうか。「私から退け、汝姦淫を犯す者よ」とのエホバの宣告は誰が受けるべきものであろうか。他人の淫行を摘発するといつても、自己の中心は既に姦淫病の根元として存在しているのをどうすればよいのか。人は他人の病気が重いのを見て、自己を無病と信じようと努めるものである。見よ、世で社会風俗の壊乱を指摘するにあたって最も熱心な者は、多くは自身敗徳の人であることを。私は「取税人のように民を虐げない」と言つて、自己の無罪を神の前に建てようとするパリサイ人の心は、普通の人間の心である。他人の罪があることは、自分の罪がないこ

との証拠ではない。自身既に梅毒を心に醸しながら、他の梅毒患者を罵り、その醜い姿を摘発して意気揚々としている愚者は誰であろうか。

「汝盗む勿れ」との戒めも、よく聖書の原理に基づいて探求するならば、私が破らない戒めではない。盗みとは窃盗や強盗のみを言うのではなく、すべて天から私に与えられていないものを自分のものとすることを言うのである。私がすべての人に秀でた才能と学問とを有していないのに、あるいは友人の庇護により、あるいはへつらいの手段をもって、私が保つべきでない官職を保つに至れば、私はその官職とその給料を盗むものである。神が私を伝道師として造られなかったのに、私が自ら伝道の職を取り、その尊厳と威力とを使用すれば、私はエリの子供たちと同じく伝道職とそれに伴う栄誉とを盗んだ者である（サムエル記第一 二章二十二節から二十五節までを参照のこと）。神を崇め国家に尽くすために私に与えられたこの貴重な生命と時間とを、自分の快樂のために消費する者もまた盗人ではないと言えるであろうか。

貧苦に責められ、飢餓に迫った老母と愛児とを救うために、心ならずも隣人の単衣一枚を盗んだ者も、社会は法律というものを設けて罰するが、白昼に公然と法律の保護の下に貧者を虐げ国家の富を掠奪しつつある無数の盗人は取り調べて問わないのである。国家の犯罪人中、十人中八、九は盗人であるとある。しかし、人類が未来の裁判を受けるに及んでは、窃盗罪を犯さない者としては実にきわめて少ないであろう。

私は偽善者であり、人を殺す者であり、姦淫を犯す者であり、盗人である。そして聖書なる電気灯をもってなお私の心中を探るならば、私は神を欺く者であろう、人を欺く者であろう。——ああ、聖書の言葉にして誤りで

あつてほしい。私はこのような光輝に耐えることができないのである。

私は罪の罪たるを知らなかった以前は、罪を犯してもそれほどの苦痛を感じなかったが、罪の憎むべきこと、罪の恐るべきこと、罪の罪たることを知りし後は、罪を犯したときは名状すべからざる不快を感じるに至った。そして罪の特性は、私たちに恐怖を与えるといえども、私たちにそれを避ける力を与えないことである。私たちは罪を犯して嘆き、嘆いて恐れ、恐れて失望し、失望してまた同じ罪を犯すものである。米国産のラトルスネーク（毒蛇の名）がリスを得ようとするとき、その尾を振り、その口を開き、木の上にいるリスに危険の念をもつて震動させ、終に自ら下りて毒蛇の口の中に飛び込ませると言われている。私たちの罪においてもまた同じである。罪の恐るべきことを知って、反対にますますその罪を犯すに至る。あたかも絶壁の上に立つときは、身を千尋の下に投げ込もうとする念が起るようなものである。この経験を有さない無慈悲な教役者は、弱い信徒の罪をただ叩くことのみをもって彼らを救おうと思っている。私もこの心霊の藪医者のためには、恐るべき危険に陥ったことが数度あった。

私に罪を犯させるものは、私に存在する罪のみではない。私は罪に沈んでいるこの世界に来て、未だ神を信じていないこの国に生まれ、私の境遇、私の社会は私を罪に導くものである。嘘をつかなければ事務を処理できない場合がある。私が真正直を言おうものなら、私一人が不利益になるのみならず、他人に迷惑を感じさせることがある。このような時にあたつて嘘をつこうと望めば良心が責めることがあり、望まなければ事が処理できないことがある。行つて教導師に意見を問えば、彼らは「君はそのような社会を去れ」と言う。しかし、キリスト教徒は

すべて牧師や伝道師であるべきではない。教役社会に身を投じて行いを清くすることより易しいことはない。しかし、私の天職が学術、殖産、商業などにあると信じるときは、私は今の地位を去るべきではない。罪を犯して天職を全うしようとするのか、あるいは身を清くすることのみをもって私の一生の目的としようとするのか。ああ、未信徒社会の中に在ってキリスト教的の生涯を送ろうとする者の苦痛と涙は、聖書を小脇に挟み、祈祷会と演説会と説教会を主宰することを永遠より定められた天職と信じる羨むべき人々が、到底推察することができないところである。

私がもし仁道をもって世に對しようとするれば、世は詐欺をもって私を迎える。彼が私に下着を求めることによって、私の上着を彼に取らせれば、彼はなお私の靴も帽子も求める。彼が私に對して不正であるから、私が彼に報いるに不正をもつてすれば、彼は私を責めるに、私が信徒であるゆえに正であるべきをもつてする。彼は不信者であるから不正をなすことを正当であると言ひ、私は信者であるから不正をなすべきでないと思う。私がキリストを信じることは、私を不信者社会において最も騙されやすいものとした。私の正直は私を彼らの道具となし、私の良心の命令を重んじることは、私を偽善者の好敵手となした。私がもし彼の不正を責めれば、彼は「あなたの愛の心をもってこれを赦せ」と言う。彼は私を欺いて私に契約を結ばせ、そして後になつてキリスト教徒たる義務としてこの契約を履行させようとする。私がもし契約を破れば、彼は神と人とを欺いたものとして私を訴え、私は詐欺者として、姦淫をなした者として、教会の裁判に渡される。世に助けのない者の中に、自己の罪を感じ、キリスト教徒のような者はいないであろう。そして、世に力強い者の中に、罪を感じないキリスト教徒（所謂）

に勝る者はいない。前者は戦々恐々として何事もなすことができず、後者は大胆不敵で何事もなすことができるであろう。罪から救われようとする者もキリスト教会に來い、正義と神聖との後ろ盾をもって罪を犯そうとする者もキリスト教会に來い。

このような社会、このような教会においては、私たちは罪を犯さないでいたいと望んでも、犯さないでいることはできない。あたかも戦国の世に生まれた人は、戦争は罪であると信じるといえども、戦わないでいることはできないのと同じである。私は罪を犯す者であり、罪を犯させられる者 (Sinning and Sinned against) である。私は神と争う者であり、神と争わないではいられない者である。もし罪を犯さない者のみが天国に入ることができるというならば、地球は人を天国に送り出すところではないようである。

惡をなす罪に加えて、善をなさない罪がある。即ち、Sin of Commission (積極的な罪) と Sin of Omission (消極的な罪) である。監督教会祈祷文の懺悔の言葉に「私たちはなすべきことをせず、なすべきでないことをなした」とある。キリスト教の道徳は、惡を避けることをもって満足とせず、進んで善を行わせる。「汝の欲しないところを人に施す勿れ」と言わず、「凡て人にしてもらいたいとあなたがたが望むことは、あなたがたも人にもその通りになせ」と言っている。私たちは退いて自分を守るべきのみではなく、進んで人を救うべきである。キリスト教の教義によれば、自己のみを救おうと努める者は滅亡に至る人である。怠惰は罪の中の罪である。何事もなさないのは惡事をなすことである。時を殺すことも人を殺すのと同じく罪である。功績のない一生は罪の一生である。フランクリンは「時は金なり」と言った。キリスト教は、「時は永遠の一部分であって、億万心霊の安否を

決するの機会である」と言う（エペソ人への手紙五章十六節を参照）。私が憎悪の念を満たすために人を死に至らせるのも殺人罪である。人の永遠の滅亡に至るのを手をこまねいて傍観する者もまた殺人罪に加わらないとは言えない。神は預言者エゼキエルに告げて言っている。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとした。あなたは、わたしの口からことばを聞き、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが、悪い者に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪い者に惡の道から離れて生きるように警告しないなら、その悪い者は自分の不義のゆえに死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪い者に警告を与えても、彼がその惡と惡の道から立ち返ることがないなら、彼は自分の不義のゆえに死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。また、正しい人がその正しい行いをやめて不正を行うなら、わたしは彼の前につまずきを置く。彼は死ななければならない。あなたが彼に警告を与えなかったので、彼は自分の罪のゆえに死ぬ。彼が行った正しい行いは覚えられない。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。しかし、もしあなたがその正しい人に、罪を犯さないように警告を与え、彼が罪を犯さないようになれば、彼は警告を聞いたのであるから、彼は必ず生き、あなたも自分のいのちを救うことになる。」（エゼキエル書三章十七節から二十一節まで）。

「私は私である、汝は汝である」という無情な世界の精神は、キリスト教が許さないところである。神は私たちの手より惡人の血を要求されるのである。兄弟が罪を犯すのは、私たちが罪を犯すことである。人類責任連帯

論はキリスト教の教義であり、近世社会学の結論である。

汝は汝の責任を果たしたのか、また果たし続けているのか。「私は知らない。私はまさか私の弟の番人であろうか」とのカインの答えを汝の答えとさせてはならない。汝は日曜日を守ったからといって、汝は他人を苦しめなからといって、汝の責任を果たしたと言うことはできない。怠惰の罪、無情の罪、不注意の罪——積極的な罪と消極的な罪、なすべきでないことをなして、なすべきことをなさない。汝はどのようにして来ようとする刑罰から免れようとするのか。

このようにして神の霊をもつて私の心を究明されるときは、私は隠れる場所がないのである。私が人の前に告白できない罪も、神の前には明らかである。私の汚らわしい感情、私の卑しい思想、人知れずして犯した罪、未だ人の知らない私の心中の欠点、——ああ、私はこれをどうすればよいのか。

たとえ「不平を忘れ、悲しい顔を捨てて明るくふるまいたい」と私が言っても、自分のあらゆる苦痛に私はおびえています。私はよく知っています。あなたが私を潔白な者となさらないことを。

私はきつと、悪しき者とされるでしょう。なぜ私は、空しく労するのでしょうか。

たとえ私が雪の水で身を洗っても、灰汁で手を清めても、

あなたは私を墓の穴に沈め、私が着る服は私を忌み嫌います。

(ヨブ記九章二十七節から三十一節まで)。

私は自分の罪に恥じて神から逃れようとするが、神は私を逃れさせない。私はエホバの標的となり、彼の矢が私にあたり、彼の手が私の体の上を圧おさえた（詩篇三十八篇二節）。私が東に行っても彼はおり、西に行ってもまた彼を見る。神は裁判の神であつて、宥恕の神ではなかつた。

罪に責められて私は全く生涯の快樂を失つた。食事が進まず、夜の眠りは妨げられ、事をなす氣力なく、ただ恐怖をもつて震えながら日を送つた。苦痛のあまり、私はある日教師の許を訪ね、幸い二、三の有名な教導師が居合せてしたので、恥を忍んで私の心中の苦痛を吐露し、彼らの援助を乞おうとした。然るに、全く私の希望に反し、彼らの中一人も私の要求に応じる者はなく、三人が等しく答えて、「私たちはそのような経験の有していない」と言つた。そして少しも私を省みなかつた。私は心中の煩悶を表白したことを恥じ、私の思慮のなさを嘆じ、失望に沈んで家に歸つた。

『天路歷程』の著者ジョン・バンヤンが、未だ宗教上の事に関して雲霧の中に彷徨しているとき、ある日、懷疑がやむことができず、近隣の一牧師を訪ね、彼の心事を吐露して牧師の慰めを得ようとした。バンヤンは、「私の心中に悪念が限りなく湧出するのは、まさに私が神に捨てられ悪魔の奴隸となつた徴候であろう」と言つた。牧師はこれを聞いて嘆じて、「たぶんそうであろう」と言つた。過敏なバンヤンは失望の上に、さらに一層の失望を加え、ほとんど立ち上がることができない状態に至つた。彼が年月を経てキリストにおける平和を得た後、彼の友人に告げて、「あの牧師は神学には詳しい人であつたが、いまだ悪魔との経験においては乏しい人であつた」と言つた。

ここに到って、罪なる大問題の解明については、私は誰にも頼るべきではないことを悟った。私は一人でこの解釈を試みようとした。人は罪から免れ得ることができるのか。免れ得るとならば、その道はどこにあるのか。この心中の苦痛から免れるのでなければ、私は何事もなすことができないのである。